

現在の赤ちゃん絵本と周辺研究の動向

仲 本 美 央

概 要

本研究では、現在の赤ちゃん絵本と周辺研究の動向を調査し、赤ちゃん絵本の読み聞かせについて考察している。近年、赤ちゃん研究はこれまで不明確とされていた発達過程を明らかにしている。絵本の読み聞かせに関しても、親子の触れ合いを形成する活動として家庭内で活発に行なわれている。これら赤ちゃん研究の発展と絵本の読み聞かせ活動の活発化から、赤ちゃん絵本の現状と絵本の読み聞かせ活動に対する捉え方について明らかにしようとするものである。

I はじめに

近年、「赤ちゃん」の研究は母子関係や医療、発達分野に限らず、さまざまな領域（霊長類学や脳科学など）において注目されている研究分野で、これまでに不明とされてきたことが解明され続けている。国内外において、注目されているこの「赤ちゃん」という研究分野は、その発展に伴い人々の認識にも影響を与え、主に育児を行う親の関心が多く寄せられている。

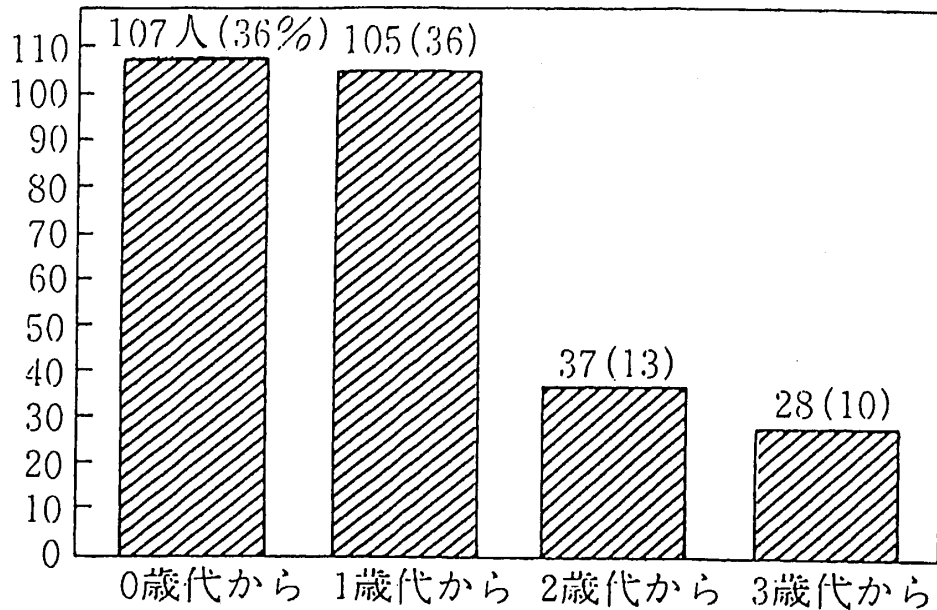
このような赤ちゃんへの関心が高まる中、2000年の子ども読書年以來注目されたものの一つに「赤ちゃん絵本」があげられる。以前に比べ、店頭に多くの種類・冊数の赤ちゃん絵本が並べられ、親子がともに絵本の購入に訪れる姿が目立ってきている。また、赤ちゃん絵本の場合、これまでは親自身の好みで絵本を選ぶケースが多かったが、親子がともに読み合いながら、選んでいる場面を見受けることができる。それが、外出間もないようなたとえ幼い赤ちゃんであっても、養育者は絵本を取って見せながら語りかけをし、赤ちゃんの反応を見ながら絵本を選別している。このように絵本コーナーの親子の姿が変化したのはなぜなのだろうか。その理由の一つに、前述したような赤ちゃんが未熟ながらも目覚ましい発達能力を持ち備

えていることを解明し続けている研究の動向が背景にあるからではないかと考える。

そこで、本研究では赤ちゃん絵本について、その周辺領域における研究の動向と照らし合わせながら、現在解明されている赤ちゃんの持ち備える能力と絵本の特性との関係性をとらえていく。さらに、各研究領域に関連した現在注目されている絵本を取り上げることで、赤ちゃん絵本の現状を探っていくものとする。また、この研究から、実際にさまざまな種類の絵本がどのように赤ちゃんに受容され、絵本を通してどのような心の活動が行われているのかというような赤ちゃんと絵本の読み聞かせ場面における研究へとつなげる基礎研究となることを目的とする。

II 家庭における赤ちゃん絵本に対する認識

現代の養育者は、子どもとのコミュニケーションをはかることが重要であることを認識している。母親のおなかから生まれる以前においても胎教などを行って、子どもとの対話を心掛ける者も多い。実際に胎児期の研究においては、子どもたちは母親の声や周辺の音を聞き、反応していることを実証している。例えば、胎教音楽の研究分野においては胎教には音楽が良いとして研究が今日



図一 1：読み聞かせの開始時期（秋田，1998）

まで続けられ、胎教音楽 CD 等が店頭に並んでいたが、最近になってただ CD から音楽を流すだけでは効果がなく、母親自身が音楽を楽しみ、ハミングなどをしながらリズムを取らなければ子どもには伝わらないことを明らかにしている。この他にもさまざまな情報を得て、実際に胎内外の我が子とのコミュニケーションを取ろうと実践している現代の母親たちは、絵本に対してどのような認識を持っているのであろうか。

秋田(1998)による東京都内の幼稚園 4 園での絵本の読み聞かせに関する調査結果によれば、「いつ頃絵本を読み聞かせ始めましたか？」という質問に対し、全体の36%が「0歳代」からと答え、「1歳代」からと答えた人も合わせれば約7割以上を占めていたという(図1)。また、「いつ頃から読み聞かせを始めることが望ましいと思いますか？」という理想を問う質問に対しては、全体の41.6%が「0歳代」からと答えている。

現在、日本では早期に絵本の読み聞かせ活動が始められているとともに、絵本そのものの販売冊数(年間出版数)や購入者数も増加傾向にある。このような絵本に対する興味・関心の高まりにおける背景の一つには、子どもが絵本と関わることによってどのような影響を与えられるのかを解明

し続けている研究の流れが存在しているからであるといえる。

また、実際に大人が子どもとの絵本の読み聞かせにおいて、形にはできないが心で感じる絵本を媒介として子どもと大人が楽しみ合うという体験が生まれることを実感しているからではないかとも考える。実際に、秋田(1998)は前述のアンケート結果の考察の中で、実際に子どもたちに早い時期から絵本を読み聞かせる行動が現れている現状があるのは、「自分としては、やってみてよかったという体験から早期からの読み聞かせを肯定するお母さんが多いと考えられます」と述べている。それだけ、読み聞かせを行なう親自身が読み聞かせに対して大きな満足度を得ているものと考えられる。

III 赤ちゃんと絵本の出会い

新生児期の赤ちゃんにとって、初めて見る絵本は目の前にあるさまざまな事物同様に、日常生活において目にうつる“もの”でしかない。その“もの”である絵本が赤ちゃんにとって道具として認識される過程には、読み聞かせを行なう大人の存在が必要となる。

絵本という“もの”を認識できない過程にある

赤ちゃんに対して、絵本の読み聞かせを行なう場面は、絵本・赤ちゃん・大人という3者の要因が相互に関連しながら成り立っている。赤ちゃんが大人が安定した環境の中でコミュニケーションを取りながら、大人の声かけによる援助によって、赤ちゃんは絵本には絵と言葉（音）があることを認識し、繰り返し読んでもらうことによって楽しむ“もの”として理解していくのである。

例えば、正高(2002)は生後8ヶ月ごろの複数の赤ちゃんに一日二回、半月間にわたって母親が同じ絵本を読んであげてくれることを試み、計三十回聞かせるという「絵本の繰り返し読み」の実験を行なっている。実験から2週間後、その絵本に出てくる単語（「ウサギ」などの単語）を録音して赤ちゃんに聞かせると興味を持ってじっと音の出る方向を注視したが、続いて絵本には出てこなかった単語を聞かせると赤ちゃんは視線をそらしたという結果が得られた。この実験結果より、正高(2002)は赤ちゃんは単語の切り出しが可能になると言葉を頭の中に記憶として蓄えるようになることを実証し、この時期の教材として絵本が最も適しているという。

それでは、絵本・子ども・大人という環境さえ整えば、子どもの単語の記憶は多くなっていくのであろうか。一概にそうであるとは言えない。短大生に対して、自由記述式で「子どもの頃の絵本の記憶はどのようなものですか？」という質問をしたところ、物語の内容よりも先に、①特定な場面ではないがお母さんや保育者との楽しい時間 ②挿絵の雰囲気 ③登場人物（キャラクター）などという記述が多かった（本学学生約260名に調査）。このような記憶における絵本の体験を振り返ってみると、意識化においては言葉を習得している認識はなくとも、子どもは楽しく大人との共有体験を行なっていく中で付随して無意識のうちに言葉の蓄積を行っていたものと考えられる。前述の正高(2002)は赤ちゃんにとって絵本が良い教材であるためには、「子どもはすべての絵本に興味を示

すのではなく、絵本の題材や読み方に大きな影響がある」「親が相手をしてあげないと効果がない」「興味をひくようなものを何度も繰り返し読んであげること」という点を指摘している。

IV 赤ちゃんの認知的発達と絵本

(1) 母親による読み聞かせと言語習得の発達

0歳から2歳代までの子どもたちは、日常生活において、ものや人との関わりによって事物を認識しながら、「アーアー」「ウーウー」などの発声→「ワンワン イル」などの2語文を話す→「コレナニ？」等のものの名前を聞くといった言語習得の発達過程を経ていく。この過程の中では、身ぶり語といわれる意思伝達方法も出現し、言葉のみならずさまざまな手段を用いながら、外界のものを認識し習得する作業を繰り返している。事物を認識し、言葉を習得する過程を経るために大切であるこの時期の絵本の読み聞かせ場面は、絵本を媒介としてコミュニケーションを取り合う子どもと大人の対話において事物の名称づけに関する内容が多く出現している。これまでの研究においては、この対話にはある一定のフォーマットが存在するものとして、多くの研究者によって探究され続けている。

母親と8ヶ月から1歳6ヶ月になるまでの子どもを対象として絵本の読み聞かせ場面を縦断的に調査し、分析した Ninio & Bruner (1978) によれば、母親の読み聞かせの仕方には「①注意喚起“みて！(Look)” ②質問“これは何？(What-question)” ③ラベルづけ“それは〇〇よ (It's a 〇〇.)” ④フィードバック“そうよ (Yes)”」の4つの発話手順からなるフォーマットが存在している。ここでは、母と子によって行なわれた対話が子どものもの（事物）に対するラベリング能力を生成することを示唆している。さらに、このフォーマットの存在を前提として、母親と1歳5ヶ月から1歳10ヶ月までの子ども20組を対象として読み聞かせ場面を横断的に調査し、分析し

た Ninio (1983) によれば、母親は子どもがラベリングできなかったものが再度出現した時には、母親自らがラベリングして子どもに言ってみせる行動が現れたが、子どもが以前に正しくラベリングしているものに関しては“これは何？ (What-question)”などの質問をし、答えさせていたという。ここでは、母親が子どもに対して正しくラベリングするように導く教授フォーマットを使用・調節し、子どものラベリング能力を産出していることがわかる。また、Ninio (1983) 同様に、Ninio & Bruner (1978) のフォーマットを前提として、母親と1歳5ヶ月から2歳2ヶ月までの間における子ども5組を対象として、読み聞かせ場面を縦断的に調査し、分析した外山 (1989) によれば、母親が“これは何？ (What-question)”などの質問を行なった際には子どものラベリングの正誤に関係なく、母親自らがラベリングを行なう傾向にあるとしている。ここでは、Ninio (1983) のいう母親が子どもに対して正しくラベリングするように言葉をかけるような教授フォーマットを使用・調節するような行動は出現していない。この2つの研究結果の違いにはさまざまな要因が考えられるが、研究への問題意識、対象児の年齢や人数、調査方法、手続き、絵本、文化差、子どもの絵本に対する経験量、フォーマットのとらえ方等の違いがあったからではないかと考えられている。さらに、外山 (1989) は、絵本の中で子どもが知っているものにはすべてラベリングさせるように母親へ教示していた Ninio (1983) の手続きが教授フォーマットを導き出したのではないかと疑問視し、読み聞かせ行動に影響を与えない教示のもとに観察を行なっている。

母親と9ヶ月、1歳5ヶ月、2歳3ヶ月の子ども各12組を対象として、読み聞かせ場面を横断的に調査し、分析した S  n  chal & Cornell (1995) によれば、9ヶ月の対象児では Ninio & Bruner (1978) のフォーマットが使用され、1歳5ヶ月、2歳3ヶ月へと年齢が上がるごとに第1発話であ

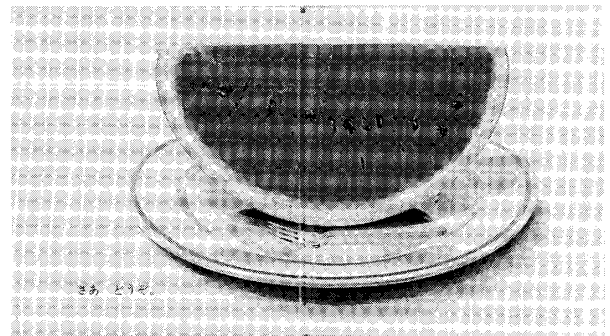
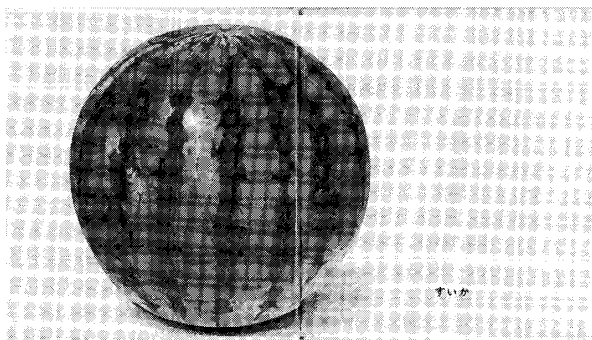
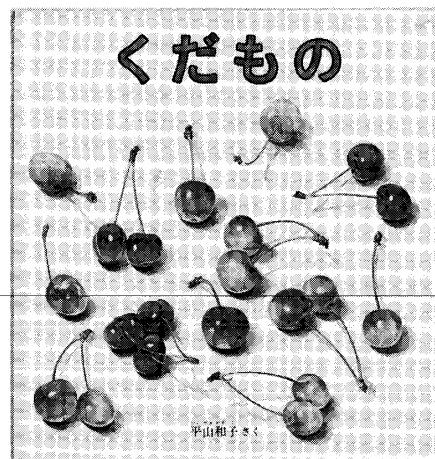
る「注意喚起“みて！ (Look)”」「質問“これは何？ (What-question)”」や「ラベルづけ“それは〇〇よ (It's a 〇〇.)”」などの発話に摩り替わるなど、多様に変化していたとしている。さらに、「フィードバック“そうよ (Yes)”」の段階においても、母親からの発話から子どもからの発話または母親からの他の発話（「質問」や「ラベルづけ」）へと年齢が上がるごとに変化していた。ここでは、子どもの年齢上昇に対する母親の発話内容の変化が示唆されている。母親と8ヶ月から3歳までの期間の第一子と1歳から3歳までの期間の第二子の子ども2名を対象として、読み聞かせ場面における対話を縦断的に調査し、分析した石崎 (1996) によれば、フォーマットの獲得は「形成期（母親が主導する）、習得期（子どもが参加する）、使用期（母親と子どもが役割交替をする）」へと進むが、2歳台でのフォーマットの形成は母親が主導権を維持していたとしている。また、第一子と第二子に対して使用されるフォーマットには違いが見られ、第一子との対話には質問反応型（母親が対話の主導権を握り命名をしながら質問を繰り返し、子どもからの反応を引き出す）が多く、第二子との対話には情報提供型（反応を引き出す言葉をあまり使用せず、母親が子どもの注意喚起への反応をとらえて説明する）が多く使用された。その要因として、第一子と第二子に対する母親の子育て観の違いや第二子と母親の対話への第一子の同席状況、子どもの言語習得スタイルなどがあると考察している。

以上のように母親は子どもに対し、ある一定のフォーマットを使用しながら読み聞かせすることで、言語習得の発達を促していることがわかる。実際に、現在市販され多くの親子の手に取られている赤ちゃん絵本の中から、このフォーマットを使用できるような題材の絵本は、実に多い。それは、赤ちゃん絵本の大半が身の周りの事物を対象としたものであるからである。代表的な絵本としては、身の周りにある事物を対象とした絵本（例：

◎身の周りにある事物を対象としたもの

『くだもの』（平山 和子作／福音館書店，1979）

・実物と同じような絵のタッチでさくらんぼやバナナ、リンゴ、スイカなどさまざまな果物が描かれ、それぞれの果物ごとに食べる時の果物の絵へと展開し、「さあ、どうぞ」の声掛けを与えられる絵本。子どもは実際に本当の果物を食べるようなしぐさをしながら、大人の声掛けによるコミュニケーションを楽しむことができる。

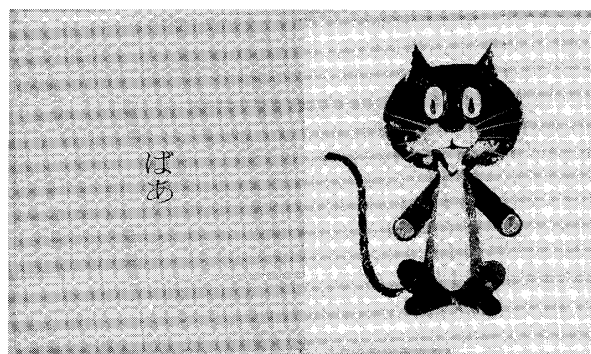
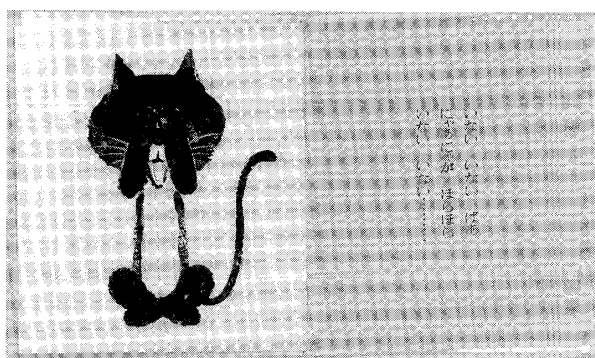


その他の絵本：『いろいろな むし』（得田 之久作／福音館書店，1986）、『やさいのおなか』（木内 勝文作／福音館書店，1997）、『でんしゃ』（B・バートン作／金の星社，）、『おにぎり』（平山 英三文・平山 和子絵／福音館書店，1981）、『がたんごとんがたんごとん』（安西 水丸作／福音館書店，1987）、『のせてのせて』（松谷 みよこ文・東光寺 啓絵／童心社，1969）他

◎身近な遊びを取り入れたもの

『いないいないばあ』（松谷 みよ子文・瀬川 康男画／童心社、1967）

・赤ちゃんには必ず行なう遊びの一つである「いない・いない・ばあ」を絵と言葉で綴った絵本。ネコやクマ、ネズミ、子どもがいない・いない・ばあを繰り返す展開は、子どもと大人が一緒に声に出しながら、遊べるようになっている。

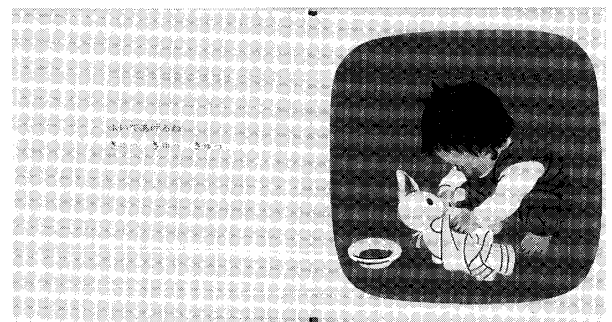
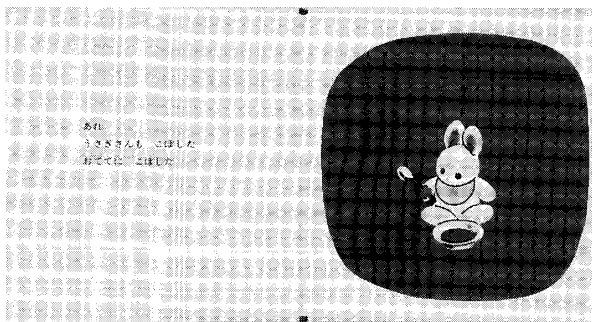


その他の絵本：『きんぎょがにげた』（五味 太郎作／福音館書店、1977）、『うたえほん』（つちだ よしはる作／グランママ社、1988）、『ゆめ にこにこ』（柳原 良平作／こぐま社、1998）、『はねはね はねちゃん』（なかがわり えこ文・やまわき ゆりこ絵／福音館書店、1995）、『たてたて よこよこ』（いしい じゅね作／らくだ出版、1997）
他

◎日常の生活習慣を題材としたもの

『きゅつきゅつきゅつ』（林 明子作／福音館書店，1986）

・赤ちゃんとおねずみとウサギとクマが一緒にご飯を食べ始めると、ご飯をこぼしてしまう度に赤ちゃんが拭いてあげてを繰り返す絵本。最後は、拭いてあげていた赤ちゃんがお口の周りを汚してしまい、お母さんに拭いてもらうという暖かな結末となっている。拭いてあげる時の「きゅつきゅつきゅつ」という音をリズムカルに声に出して楽しむことができる。



その他の絵本：『みんな うんち』（五味 太郎作／福音館書店，1977）、『もう ねんね』（松谷 みよ子作・瀬川 康男絵／童心社，1968）、『どうすれば いいのかな』（わたなべ しげお文・おおとも やすお絵／福音館書店，1977）、『おててがでたよ』（林 明子作／福音館書店，1986）他

『くだもの』平山 和子作／福音館書店, 1979) や身近な遊びを取り入れた絵本 (例: 『いないいないばあ』松谷 みよ子文・瀬川 康男画／童心社, 1967)、日常の生活習慣を題材とした絵本 (例: 『きゅつきゅつきゅっ』林 明子作／福音館書店, 1986) などが多い。それらの絵本から、日常生活の中で体験している内容を題材として選び、赤ちゃんにとっての楽しい時間を共有することが、最適な子どもと絵本との出会いを形成する要素といえよう。

(2) 顔を讀む赤ちゃん

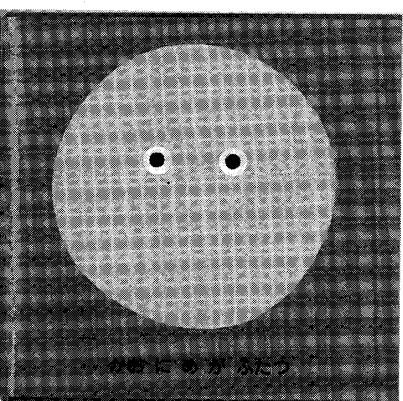
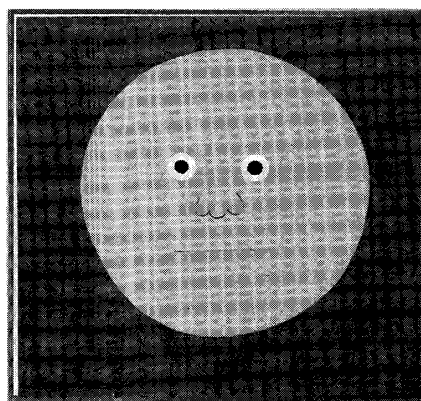
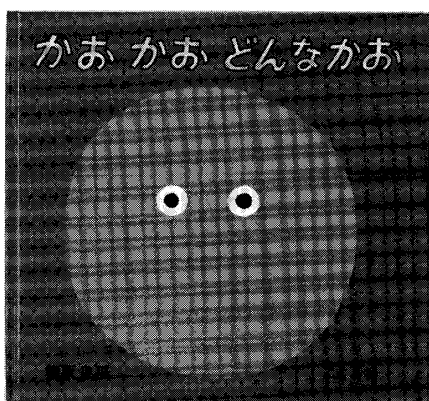
赤ちゃんは、一番身近である養育者の顔の表情を見たり、声を聞きながらコミュニケーションを取っている。このように、赤ちゃんが顔の表情を讀むことは、近年の実験研究によって明らかにされてきた。Johnson, M.H. & Morton, J (1991) によれば、模倣に注目した実験場面において赤ちゃんの目の前で舌を出す動作を繰り返して見せると、赤ちゃんはじっくりと観察し、次第に顔の表情を真似たり、舌を出す行動が現れるという結果を導き出している。この行動は、生後数時間の赤ちゃんにも見られる行動であることが明らかと

なった。ここで、赤ちゃんの顔の表情を見るという行動能力を持ち備えていることがわかる。

また、赤ちゃんは顔を見るだけでなく生後7ヵ月頃から表情も理解していることがさまざまな研究結果から明らかにされている。Phillips, Wagner, Fells & Lynch (1990) によれば、微笑みと悲しみの表情と声色が一致しているものと矛盾しているものを赤ちゃんに提示する実験研究の結果により、表情と声色の一致している方に注目することがわかった。このように顔を見るという行動だけでなく、表情を讀むことまで明らかとなっているのである。

赤ちゃん絵本には、顔の表情を主として描かれている絵本も多く存在する。例えば、『かお かお どんなかお』(柳原 良平作／こぐま社, 1988) は、顔そのものを題材とした絵本である。笑った顔に泣いた顔、怒った顔にからい顔といったようにさまざまな表情が描かれ、実際の赤ちゃんは一つひとつのページに描かれた顔に注目し、笑ったり、真似たり、時には考え込んだ表情をしている。顔に注目する赤ちゃんの特性から得られる楽しみ方といえよう。また、これらの絵本を媒介として赤ちゃん和大人が、互いの表情を作り合いながらと

『かお かお どんなかお』(柳原 良平作／こぐま社, 1988)



その他の絵本: 『おつきさま こんばんは』(林 明子作／福音館書店, 1986)、『おひさま あはは』(前川かずお作／こぐま社, 1989)、『いないいないばあ』(松谷 みよ子文・瀬川 康男画／童心社, 1967) 他

いった遊びを取り入れた活用方法も可能となり、人間の表情を認識していく発達過程における子どもにとっては、自然に表情を見つめることができる道具として取り上げることができるのではないかと考える。

(3) 赤ちゃんの情動の発達と絵本

これまでの赤ちゃんを対象とした絵本の読み聞かせ場面における研究は、主に母子の対話が対象となり、言語習得の発達に焦点を当てられていた。これらの研究の流れに対し、1歳代は情動面においても多大な発達過程を経る時期であることに着目した古屋ら(2000)や磯部・池田(2002)が絵本と情動に関する研究を行なっている。古屋ら(2000)は、母親と1歳児の子ども4組を対象として、絵本場面における情動の表出と理解に関する研究を行なっている。主に「泣き」と「怒り」に焦点化した絵本を材料に、月に約1度の割合で1年間母子による絵本読み場面の観察を行なった結果、「泣き絵本」では1歳半ば頃には泣き表情の原因と結果についての安堵、喜びの情動を認知し、共感を示す表情変化が見られたとし、「怒り絵本」では共感の表情変化に個人差が多く見られたとしている。また、表情だけではなく「泣き」に対する模倣行動や1歳半ば頃から登場人物の行動や状況に関する子どもの叙事的発話も出現したとしている。叙事的発話の中には登場人物に対する非難や気持ちの説明も含まれていた。この研究結果から、子どもは1歳代において、すでに絵本を単なる事物が描き出されているものとして認識しているだけでなく、そこに表現されている内容を理解する力を持ち備えていることが明らかである。このような絵本場面における情動面での赤ちゃん研究は始まったばかりである。今後、探究していくことが注目される分野の一つといえよう。

V ブックスタートプロジェクト

ブックスタートプロジェクトとは、1992年イギ

リスにおいて「Share books with your baby」と唱えられ始まった読書活動である。この活動の始まりには、多民族文化ゆえに抱える就学前の読み書き能力低下問題や本の取り扱いを知らない子どもが多いというバーミンガムの状況が背景にあった。乳幼児という早い時期に絵本と出会い、この中で子どもと親が絵本を通して楽しい時間を分かち合う大切さを持つことでこれらの問題を予防していこうとした活動である。現在、イギリス国内自治体の9割近くでこの活動が行なわれている。活動内容は、新生児7～9ヵ月の乳児検診の際に数冊の絵本や読み聞かせに関する手引書、図書館の利用案内・育児支援の情報等をパックにして配布することである。

このプロジェクトの効果について、イギリスの国立研究所や大学関係機関の研究者は縦断的に研究している。これらの研究結果によって、母子の行動や意識・プロジェクト有群とプロジェクト無群における読み聞かせ時の行動(本に興味を示す、質問に答える等)の相違(Wade & Moore, 1998)・子どもの就学後の学力(Bocktrust, 1998)等の調査が行なわれ、その有効性が報告されている。

2000年、「子ども読書年推進会議」が開催された日本においてもこの活動に着目し、モデルケースとして都内一区内で実施され、2001年4月には「ブックスタート支援センター」が設立した(2002年1月にNPO団体)。この日本におけるプロジェクトは、秋田・横山(2002)や梶浦(2002)によって、一部地域の成果報告がなされている。秋田・横山(2002)は、ブック支援センターの依頼によって、モデルケースとして都内一区内で実施されたブックスタートプロジェクトの意義と効果を検討するための質問紙調査結果を報告している。この研究報告は、ブックスタートプロジェクトにおける絵本の出会いに関する親の意識を調査したもので、パック配布群とパック無配布群の460名を対象に、調査結果からブックスタートへの満足度・パッ

ク配布による行動変化の認識・パック配布と育児状況との関連・読み聞かせの環境と読み聞かせ行動・読み聞かせの意義と行動・読み聞かせとテレビ視聴の比較などを考察している。また、梶浦(2002)はモデルケース後初の自治体である北海道恵庭市で実施されたブックスタートプロジェクトを質問紙調査し、報告している。この研究報告では、秋田・横山(2002)と同様に親の意識を調査したものであるがパック配布した親子のみ117組を対象とし、パック配布後の満足度・配布後の行動などを考察している。

これら2つの調査から共通点として、パック配布に対する満足度の高いことや家庭内における読書行動の変化(配布された本を読む・親が絵本に興味関心を持っている・父親が絵本を読み聞かせる等)は高いが、家庭外への行動の変化(図書館やへ連れていく・文庫や児童館へ行く等)が他の結果に比べて低いという結果が得られている。また、パック配布群とパック無配布群を対象にした秋田ら(2002)の調査からは、育児ストレスは両群ともに差は見られないという結果も得られた。その他の調査結果もふまえてブックスタートプロジェクトは否定的なものを低減するのではなく、親にとって子どもの環境をより望ましい方向へもたらすことへの関心を高めるといった肯定的な意識の向上効果をもたらしていると考察されている。

このように、国内での取り組みも調査も始まったばかりのブックスタートプロジェクトではあるが、その成果に対する期待は大きい。特に、活動の基本理念としている「絵本を通して親子が楽しい時間を分かち合う」という点では、スタート直後の調査からその効果が明らかとなっている。今後、読書に関わる研究分野において、長期にわたる調査研究の中で子どもの発達と読書環境にどのような変化が生じるのか興味深い活動といえよう。

VI おわりに

ここ数年間によって、赤ちゃんに関する研究は目覚ましい発展を遂げてきたといえる。赤ちゃんの絵本に関わるような研究を取り上げただけでも、上述のような研究結果を導き出している。これだけの研究が行なわれた背景には、赤ちゃんが思いもよらないような能力を持ち備え、その発達過程の中で外界のものと触れ合い、楽しみ、成長する存在であるからであると考えられる。

本研究では、赤ちゃんにとっての外界のものの一つである絵本を取り上げ、赤ちゃん絵本と周辺研究を照らし合わせてきた。絵本自体は、赤ちゃんの持ち備える能力一つひとつが解明される以前から存在しているもので研究によって導き出された赤ちゃんの能力の裏付けなくとも赤ちゃん自らが楽しんでいたといえる。しかし、絵本の読み聞かせ活動が早期に始められ、絵本そのものの販売冊数(年間出版数)が増加傾向にある現在、絵本の選択の幅は広がり、読み手である大人は子どもにどのような絵本を与えたら良いのかと困難を要するものと思われる。今後は子どもの発達に即した絵本選択の指標として、今現在、明らかにされている赤ちゃんの能力を把握することが大切なことであると考えられる。さらには、赤ちゃん自身にこれほどまでの能力が備わっていることを養育者一人ひとりが理解することで、大人が絵本を選んであげる存在ではなく、ともに選ぶ存在であることに認識していくべきである。第二節において「絵本を媒介として子どもと大人が楽しみ合うという体験が生まれることを実感している」と述べたことやブックスタートプロジェクトの基本理念があるように、低年齢の子どもと大人にとって絵本は大人が与えるものではなく、ともに楽しみ合うものであることが、現在の絵本のとらえ方といえよう。これまでのような学習能力を発展させるものとして絵本をとらえるのではなく、「大人と子どもが楽しむための媒体」としての絵本を認識すべき

である。

今後は、この研究を基礎として、実際の赤ちゃんと大人と絵本の3者間の関係性を捉えるとともに、今現在解明されている赤ちゃんの能力とさまざまな特性を持つ絵本との相互作用を読み聞かせ場面を対象に絵本研究を行っていきたいと考える。

<引用・参考文献>

- 1) 秋田 喜代美。(1997)。読書の発達過程—読書に関わる認知的要因・社会的要因の心理学的検討—。風間書房。
- 2) 秋田 喜代美。(1998)。読書の発達心理学 子どもの発達と読書環境。国土社。
- 3) 秋田 喜代美。(2000)。子どもの発達と読書環境。日本読書学会第44回研究大会発表資料集, 150-162。
- 4) 秋田 喜代美・横山 真貴子・ブックスタート支援センター。(2002)。ブックスタートプロジェクトにおける絵本との出会いに関する親の意識(1) — 4ヵ月時でのプロジェクト効果。
- 5) 日本保育学会第55回発表大会発表論文集, 164-165。
- 6) 古屋 喜美代・高野 久美子・伊藤 良子・市川 奈緒子。(2002)。絵本読み場面における1歳児の情動の表出と理解。発達心理学研究, 11(1), 23-33。
- 7) 石川 由美子・前川 久男。(2000)。絵本を媒介とした母親と子どもの読み活動に関する研究の動向。心身障害学研究, 24, 227-240。
- 8) 石崎 理恵。(1996)。絵本場面における母親と子どもの対話分析:フォーマットの獲得と個人差。発達心理学研究, 7(1), 1-11。
- 9) 磯部 陽子・池田 由紀江。(2002)。絵本読み場面における情動認知の発達。心身障害学研究, 26, 33-44。
- 10) 梶浦 真由美。(2002)。北海道恵庭市におけるブックスタート(その1) — その取り組みと成果 —。日本保育学会第55回発表大会発表論文集, 162-163。
- 11) Lonigan, C.J.(1994) Reading to preschoolers exposed: Is the emperor really naked?. *Developmental Review*, 14, 303-323.
- 12) Ninio, A. & Bruner, J.S.(1978). The achievement and antecedents of labelling. *Journal of Child Language*, 5, 1-15.
- 13) Ninio, A.(1983). Joint Book Reading as a Multiple Vocabulary Acquisition Device. *Developmental psychology*, 19(3), 445-451.
- 14) 大村 彰道・荻野 美佐子・遠藤 利彦・針生 悦子・石川 有紀子・白佐 いずみ。(1989)。絵本読み場面における母子相互作用(第1報) — 母親の発話カテゴリー —。安田生命社会事業団研究助成論文集, 25, 24-33。
- 15) 大村 彰道・荻野 美佐子・遠藤 利彦・針生 悦子。(1990)。絵本読み場面における母子相互作用(第2報) — 3歳児と4歳児に対する母親の発話の変化 —。安田生命社会事業団研究助成論文集, 26, 17-25。
- 16) Phillips R.D., Wagner, S.H., Fells, C.A. and Lynch, M.(1990). Do infants recognize emotion in facial expressions?: categorical and 'metaphorical' evidence. *Infants Behavior and Development*, 13, 71-84.
- 17) 産経新聞「新・赤ちゃん学」取材班。(2003)。赤ちゃん学知っていますか?。新潮社。
- 18) Sénéchal, M. & Cornell, E.h.(1995) Age-Related Difference in Organization of Parent-Infant Interactions During Picture Book Reading. *Easy Childhood Research Quarterly*, 10, 317-337.
- 19) Snow, C. & Ninio, A.(1986). The contracts of literacy: What children learn from learning to read books. In W.H. Teals & E. Sultzby(Eds.) *Emergent literacy: Writing and reading*. 116-138. Norwood, NJ: Ablex.
- 20) 外山 紀子。(1989)。絵本場面における母親の発話。教育心理学研究, 37(2), 151-157。
- 21) 内田 伸子編。(1998)。言語発達心理学=読む書く話すの発達=。放送大学教育振興会。
- 22) Wells, G.(1985). Preschool literacy-related activities and success in school. In D. Olson, N. & A. Hildyard(Eds.) *Literacy, Language, and learning: The nature and consequences of reading and writing*. New York: Cambridge University Press. 229-255.
- 23) 山口 真美。(2003)。赤ちゃんは顔を読む 視覚と心の発達学。紀伊国屋書店。
- 24) 横山 真貴子。(1997) 就寝前の絵本の読み聞かせ場面における母子の対話内容。読書科学, 41, 3, 91-104。
- 25) 横山 真貴子・秋田 喜代美・ブックスタート支援センター。(2002)。ブックスタートプロジェクトにおける絵本との出会いに関する親の意識(2) — 4ヵ月時での親の読み聞かせに対する考えと行動。日本保育学会第55回発表大会発表論文集, 166-167。

(2003年9月30日 受理)

A Study about Current Baby's Picture-Books and a Tendency for Its Peripheral Research

Mio Nakamoto

Abstract

This is a study about reading picture-books to babies to investigate current baby's picture-books and a tendency for its peripheral research. In recent years, research about babies reports make it clear that the baby's developmental process is unknown. Reading picture-books as a family activity establish a parent-child relationship. The state of picture-books and grasping the real meaning of reading picture-books makes it clear for research and reading picture-books at the present time.